

児童の学業成績における 自己評価維持と学級適応に関する研究

Self-evaluation Maintenance in Actual School Performance and School Morale among Elementary Schoolchildren

磯崎 三喜年 ISOZAKI, Mikitoshi

● 国際基督教大学 International Christian University



自己評価維持, 学級適応, 成績, 友人選択

Self-evaluation Maintenance, School Morale, Actual Grade, Friend Choice

ABSTRACT

The relation between self-evaluation maintenance in school performance and school morale among elementary school children was examined. Questionnaires were administered to two hundred and fifteen (113 male, 102 female) elementary schoolchildren. They were asked to name their close classmates and school subjects which they considered both relevant and not relevant to their self-definition. They were also asked to complete the School Morale Test (SMT, Nihon Bunka Kagakusha). The SMT consists of four categories of 15 items each (e. g., motivation to learn, interest in school, etc.). Analyses of actual grades showed that the children performed better than their close friend on highly self-relevant subjects and performed worse on less relevant subjects. That is, the children showed the operation of the self-evaluation maintenance mechanism predicted by the SEM model. This self-evaluation maintenance mechanism was found among the higher learning motivation group but not among the lower learning motivation group. It was also found that both the higher elementary school interest group and the higher elementary school classmate relationship group showed a self-evaluation maintenance tendency.

These results suggest that children with higher school morale engage in self-evaluation maintenance and it is necessary to help the children with lower school morale engage in self-evaluation maintenance.

子どもにとって、学校生活は楽しいものとなっているだろうか。また、子どもは、自己を好ましいものにとらえているだろうか。学校生活の楽しさと自己の好ましさは、密接に関連していると思われる。級友との関係が安定していたり、学習意欲があるなど、学級適応がよい子どもは、自己を肯定的にとらえやすく、また、実際の成績も好ましいものとなりやすい。逆に、学級適応が十分でない子どもは、自己を肯定的にとらえにくく、学習活動も消極的になりがちである。

では、自己を好ましいものにとらえる、あるいは肯定的にとらえるとはどういうことだろうか。この点については、さまざまな議論が成り立つと思われるが、ここでは、Tesser (1984) による自己評価維持 (self-evaluation maintenance: SEM) モデルに基づき検討を進めることにする。

Tesser (1984) による SEM モデルは、人はポジティブな自己評価を維持しようと動機づけられているとの基本仮定に立っている。この自己評価は、反映過程と比較過程という相反する過程をへて上昇したり下降したりする (磯崎, 1989, 1998; 山口, 1990 など参照)。反映過程とは、心理的に近い (自己とユニット関係にある) 他者の優れた遂行によって自己評価が引き上げられる場合を指す。逆に比較過程は、心理的に近い他者の優れた遂行によって自己評価が引き下げられる場合をいう。こうした相反する過程のいずれが生起するかは、その活動内容が自己にとってどのくらい重みをもっているか (関与度) によって規定される。関与度が低いとき、心理的に近い他者の優れた遂行は反映過程を生起させ、自己評価を上昇させる。しかし、関与度が高いとき、心理的に近い他者の優れた遂行は比較過程を生起させ、自己評価を低下させる。このように、心理的な近さと遂行という 2 つの要因に、関与度という要因が作用することによって、一方は自己評価の上昇を、もう一方は自己評価の低下をもたらすのである。自己評価の低下は不快感をもたらすため、人は自己評価を維持すべく、その解消へと動機づけられることになる。

Tesser, Campbell & Smith (1984), 磯崎・高橋 (1988), 磯崎 (1994) などの研究において、小学生

段階でこうした自己評価維持機制がみられることが確認されている。すなわち、自己にとって関与度の高い教科においては、自己の方が心理的に近い他者 (友人) より優れており、関与度の低い教科においては、友人が自己よりも優れているとの結果が得られている。また、磯崎・高橋 (1993) は、時系列的な研究において、子どもが、友人との心理的な近さ (友人選択)、自己にとっての教科の関与度、教科のでき具合 (認知および実際の成績) をさまざまに変えて自己評価の維持を図っていること、特に、これらを組み合わせて変えることが多いことを明らかにしている。

こうした自己評価の維持は、子どもの学習への動機づけなどの学校活動や学級適応において重要な意味を持っている。Tesser & Campbell (1982) は、子どもは、自己にとって関与度の高い学習活動において、他者が心理的に近ければ近いほど、自己評価維持のため、当該活動で優れた成績をあげようと努力すると指摘している。つまり、学習への動機づけは、友人関係や当該学習活動への自己の関与度、そして友人との相対的なでき具合によって規定されることになる。その意味で、自己評価の維持は、学業成績や友人関係のあり方と関わるだけでなく、子どもの学習意欲を始めとした学校や学級への適応にも大きな影響を与えている。自己評価の維持は、個人が自己 (および友人) のよさを感じとろうとしていることを意味している。本研究での自己の好ましさ、あるいは自己を肯定的にとらえるとは、こうした自己評価が維持されていることをさす。また、自己評価を維持できる状況を作り出すことそのものが、より適応的であることになる。逆に、自己評価の維持がむずかしい状況では、自己のよさを十分に感じとることができず、そこでの生活は適応的なものとなりにくい。

また、ある領域での個人の達成度が、その領域に対する個人の関心や関与度を左右したり、友人関係のあり方が個人の関心領域に影響を与えることも指摘されている (Tesser & Campbell, 1985)。いずれにせよ、他者との心理的な近さ、自己にとっての当該活動の関与度およびそのでき具合は、

相互に関連しており、それが個人の学校生活や学級適応に影響を与えていると推測される。SEM モデルは、これらの相互関連を力動的に説明しており、学校生活や学級適応のよい子どもは、自己評価の維持がなされていることが示唆される。児童の自己評価維持と学級適応について検討するゆえんである。

こうしたことから、磯崎 (1997) は、小学校 5、6 年生を対象に、どういった教科を関与度の高いあるいは低い教科としているか、またそのでき具合を自己と友人それぞれについて評定を求め、学級適応診断検査 (SMT, 日本文化科学社) における学習意欲や友人関係の安定性など、学級適応の各尺度とそれらの関連を検討した。その結果、学習意欲が高い児童 (特に男子) ほど、自己評価の維持がなされていることが明らかとなった。逆に学習意欲の低い児童は、反映過程のみが生起し、自己評価維持がなされていない。学習意欲の低い児童は、一方的に友人のよさを認める形となっており、自己を萎縮させている。逆に、そうした一方的な関係にあることが、学習意欲を阻害しているといえるかもしれない。いずれにせよ、学習意欲の低い子どもに対し、自己評価の維持が可能となるような働きかけの必要性が示唆された。ただし、この研究では、子どもがとらえた自己と友人の教科のでき具合の認知 (自己評定) を取り扱っており、実際の成績との関係は明らかにされていない。また、級友関係の安定性や学校への関心、さらにはそれら下位尺度を合わせた学級適応 (スクール・モラル) の高低など、学習意欲以外の学級適応の指標と自己評価維持の関連は必ずしも明確ではなかった。磯崎・高橋 (1993) など、自己評価維持は、実際の成績との関連が強く示されている。したがって、本研究では、実際の成績を測度として用いて、学級適応と自己評価維持の関連を明らかにすることを目的とする。

また、あわせて、児童の自尊心レベルと自己評価維持との関わりについても、検討を行うことにした。すでに、磯崎・高橋 (1988) において、自尊心の低い被験者は、実際の成績で自己評価を維持できるよう友人を選択していることが示唆されて

いる。しかし、こうした結果は必ずしも明確ではない。したがって、自尊心のレベルと自己評価維持について、あらためて実際の成績を測度として検討を行うことにする。また、一般に、自尊心の高い人は、自分自身を肯定的に認知し、それが他者認知においても調和的に作用し、他者を好意的、肯定的に認知する傾向があるとされている。蘭 (1990) は、こうした傾向をポジティヴィティと呼び、それは、他者が友人のときにより大きいとしている。では、ポジティヴィティ傾向は、認知ではなく、実際の成績を用いた場合はどうなるだろうか。自尊心の高い児童にのみ、ポジティヴィティがみられるのだろうか。また、関与度の高さはポジティヴィティとどう関わるだろうか。こうした点についても、検討を加えることにした。なお、ここでは、自尊心は、Rosenberg (1965) の自尊心尺度 (Self-Esteem Scale) を用いて測定した。この自尊心尺度は、質問項目が 10 項目であり、小学生段階でも比較的答えやすいと判断した。また、学校生活や学級への適応の程度を示す指標として、学級適応診断検査 (SMT) を用いた。学級適応とは、“児童・生徒の学校や学級集団への帰属感、安定感、などを基礎とした、学校や学級での諸活動に対する積極的で意欲的な心理状態”をさすとされている (学校モラル研究会, 1984)。そして、その下位尺度として、級友との関係、学習への意欲、学校への関心、教師への態度、家族関係の認知の 5 つのカテゴリーがある。ここでは、教師への態度を除く 4 つのカテゴリーを取り上げた。

以上から導かれる本研究の仮説は以下のとおりである。

- 仮説 1: 実際の成績においては自己評価維持がなされているであろう。
- 仮説 2: 学級適応のよい (スクール・モラルの高い) 児童は、自己評価維持がなされているであろう。
- 仮説 2a: 級友関係の安定している児童は、自己評価の維持がなされているであろう。
- 仮説 2b: 学習意欲の高い児童は、自己評価の維持がなされているであろう。

仮説 2c: 学校への関心の高い児童は、自己評価の維持がなされているであろう。

なお、学級適応診断検査の下位尺度のひとつである家族関係の認知と自己評価維持との関連、および自尊レベルと自己評価維持の関連については、これまでの研究から明確な仮説を導くことはできない。したがって、ここでは、仮説を設定しないことにする。

方法

調査対象者

公立の 2 つの小学校 5 年生計 4 クラス、6 年生計 5 クラスの計 215 名 (男 113 名, 女 102 名) であった。これは分析に必要な基本的回答を満たした有効回答者数であり、磯崎 (1997) と同一対象者である。

手続き

質問紙調査による。調査の実施は、筆者と大学院生と学部生が、2 ないし 3 名で 1 つのチームを組み、各クラスごと一斉に行った。調査は、2 学期に行われた。

まず、“この調査は、皆さんが日頃感じていることや思っていることをお尋ねしようとするものです。皆さんの答に良い悪いはありませんので、思ったままありのままを答えてください”と教示した。そして、簡単なフェイス・シートに答えさせた。質問項目は、教科の関与度、他者との心理的近さを調べるためのものから成っている。

教科の関与度、他者との心理的近さおよび実際の成績

教科の関与度をみるため、小学校の各教科名 (国語、算数、理科、社会、音楽、家庭、図工、体育) を列挙し、このうち、誰にも負けたくないと思う教科を 2 つ (“一番負けたくないと思う”教科、“二番目に負けたくないと思う”教科) を順に挙げさせた。この 2 教科を高関与教科とした。同様に、“負けてもあまり気にならない”教科を順に 2 つ挙げさせた (低関与教科)。

次に、心理的に近い他者 (友人) として、“あなたは、学校にいるとき、クラスの中で、誰と一番いっしょにいたいと思いますか”と尋ね、その人の名前を挙げさせた。これが、心理的近さの測定にあたる。

このあと、Rosenberg (1965) の自尊心尺度 (4 件法 10 項目) および学級適応 (スクール・モラール) を測定する質問項目に回答させた。自尊心尺度は、小学生でも回答できるよう平易な日本語の形で提示した。学級適応 (スクール・モラール) は、小学校用学級適応診断検査 (SMT, 日本文化科学社) を用いた。これは、学校への関心、級友との関係、学習への意欲、教師への態度、家族関係の認知の 5 つのカテゴリー (それぞれ 15 項目) から成っている。今回の調査では、教師への態度に関する質問項目を除外した残り 4 つのカテゴリー計 60 項目を用いた。各項目に対して、いずれも 3 件法 (“はい”, “どちらでもない”, “いいえ”) で回答を求めた。各カテゴリーごとの可能得点範囲は、-15 から +15 であり、SMT 合計の可能得点範囲は、-60 から +60 であった。最後に、記入漏れがないかどうかを児童に尋ね、調査を終了した。調査終了後、各教科ごとの児童の実際の成績 (調査実施の前学期にあたる 1 学期末のもの) のデータ (3 段階評価) を学校側から得た。この実際の成績が、遂行の測度となる。

結果

データの分析は、以下の基準によって行われた。

関与度

“一番負けたくないと思う”2 教科を高関与教科、“負けてもあまり気にならない”2 教科を低関与教科とした。

心理的近さ

“一番いっしょにいたい”クラスメートを友人 (心理的に近い他者) とした。

実際の成績

高関与教科 2 教科、低関与教科 2 教科のそれぞれ

れの実際の成績（3段階評価）の平均値を実際の成績（遂行）の測度とした。

1 実際の成績による自己評価維持についての全体の結果

高関与教科，低関与教科それぞれについての自己および友人に対する実際の成績を Figure 1 に示した。Figure 1 について，性（男，女）×関与度（高，低）×対象（自己，友人）の分散分析（性は被験者間変数，関与度と対象は被験者内変数）の結果，関与度と対象の交互作用が有意となった ($F(1, 213) = 31.46, p < .001$)。関与度の高低別にみると，自己にとって関与度の高い教科では，自己の成績が友人より優れ ($F(1, 213) = 5.44, p < .05$)，自己にとって関与度の低い教科では，友人の成績が自己より優れていた ($F(1, 213) = 12.93, p < .001$)。

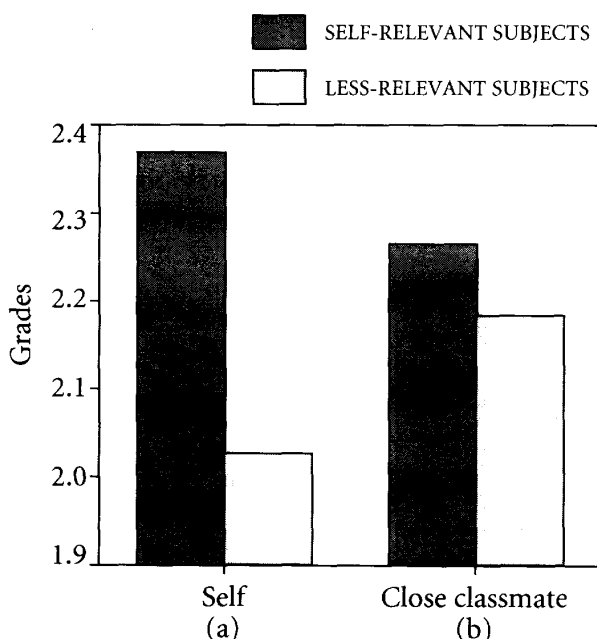


Figure 1. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects.

2 男女別にみた自己評価維持

関与度別の自己および友人に対する実際の成績を男女別に示したのが，Figure 2 および Figure 3

である。男子では，関与度（高，低）×対象（自己，友人）の分散分析（いずれも被験者内変数）の結果，関与度と対象の交互作用が有意となった ($F(1, 112) = 23.04, p < .001$)。高関与教科で，自己が友人より優れ ($F(1, 112) = 5.25, p < .05$)，低関与教科で，友人が自己より優れていた ($F(1, 112) = 7.90, p < .01$)。つまり，男子は，SEMモデルの予測どおりの結果となった。女子は，同様な分析の結果，関与度と対象の交互作用が有意となった ($F(1, 101) = 9.76, p < .01$)。ただし，高関与教科で，自己と友人との差はみられず ($F(1, 101) < 1$)，低関与教科で，友人が自己より優れていた ($F(1, 101) = 5.23, p < .05$)。

3 自尊心の高低と自己評価維持の関連

自尊心尺度計 10 項目の男女別平均は，男子 25.96 ($SD = 3.87$)，女子 24.63 ($SD = 4.54$) であった。自尊心得点の男女差が有意であったため ($t = 2.32, df = 212, p < .05$)，男子 26 点以上，女子 25 点以上を自尊心高群，男子 25 点以下，女子 24 点以下を自尊心低群とした。なお，自尊心尺度 10 項目の信頼性係数 $\alpha = 0.70$ であった。自尊心高群，低群別の関与度別の自己と友人の実際の成績を Figure 4 および Figure 5 に示した。自尊心高群 ($n = 115$) は，先と同様の分散分析の結果，関与度と評定対象の交互作用が有意で ($F(1, 113) = 10.55, p < .01$)，高関与教科では，自己が友人より優れている傾向があり ($F(1, 113) = 3.69, p < .06$)，低関与教科では，自己と友人との間に差がみられなかった ($F(1, 113) = 2.53, ns$)。自尊心低群 ($n = 99$) は，関与度と対象の交互作用が有意で ($F(1, 97) = 20.37, p < .001$)，高関与教科で自己と友人の間に差がみられず ($F(1, 97) = 1.23, ns$)，低関与教科で友人が自己より優れていた ($F(1, 97) = 12.29, p < .01$)。

また，男女と自尊心の高低を組み合わせると，男子の自尊心高群 ($n = 64$) の場合，関与度と対象の交互作用が有意で ($F(1, 63) = 12.28, p < .01$)，高関与教科で，自己 ($M = 2.35, SD = .58$) が友人 ($M = 2.06, SD = .58$) より優れ ($F(1, 63) =$

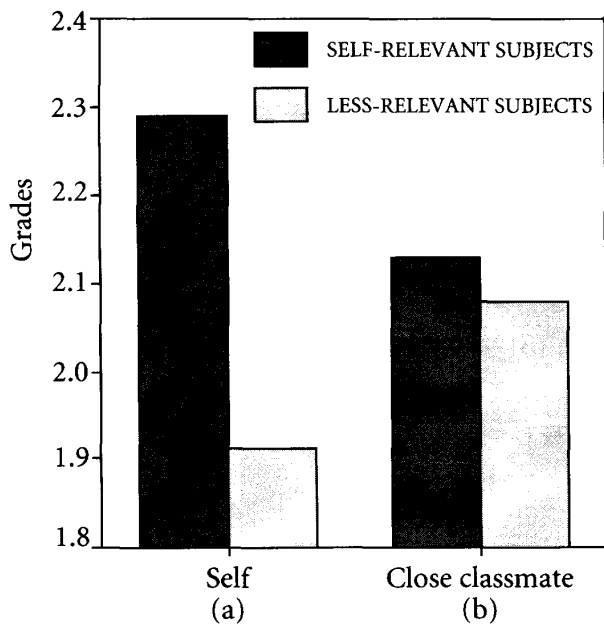


Figure 2. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects, in male elementary school children.

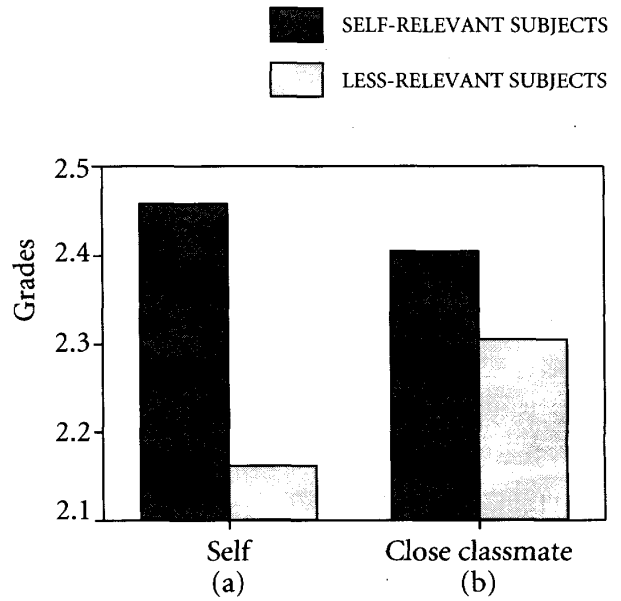


Figure 3. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects, in female elementary school children.

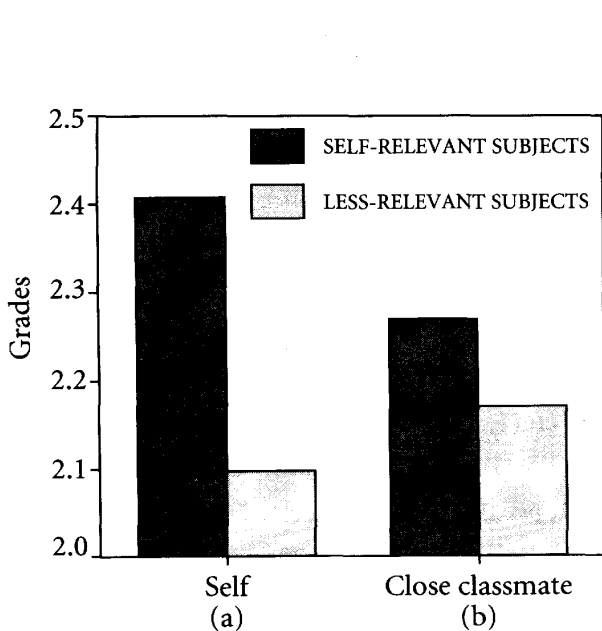


Figure 4. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects, in higher self-esteem group.

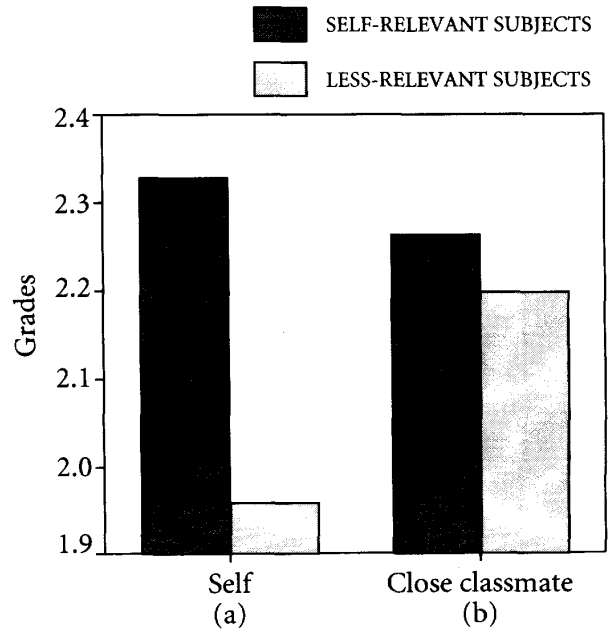


Figure 5. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects, in lower self-esteem group.

8.89, $p < .01$), 低関与教科で, 自己 ($M = 1.99$, $SD = .43$) と友人 ($M = 2.02$, $SD = .43$) との間に差がみられなかった. 男子の自尊心低群 ($n = 48$) は, 関与度と対象の交互作用は有意であったが ($F(1, 47) = 9.51$, $p < .01$), 自尊心高群とは逆に, 高関与教科で自己 ($M = 2.23$, $SD = .54$) と友人 ($M = 2.24$, $SD = .55$) で差がみられず, 低関与教科で自己 ($M = 1.82$, $SD = .47$) よりも友人 ($M = 2.16$, $SD = .49$) の成績が優れていた ($F(1, 47) = 11.84$, $p < .01$).

4 学級適応 (スクール・モラル) と自己評価維持の関連

学級適応 (スクール・モラル) 診断検査における 4 カテゴリーの合計得点の平均は, 男子 22.93 ($SD = 15.45$), 女子 22.26 ($SD = 15.83$) であり, 男女間に有意差はみられない. そこで, 学級適応合計得点 23 点以上をスクール・モラル高群, 22 点以下をスクール・モラル低群とした.

スクール・モラルの高群, 低群別の自己と友人の実際の成績を Figure 6 および Figure 7 に示した. スクール・モラル高群 ($n = 109$) は, 関与度と対象の交互作用が有意で ($F(1, 107) = 11.78$, $p < .01$), 高関与教科では, 自己が友人より優れている傾向がみられ ($F(1, 107) = 2.87$, $p < .10$), 低関与教科では, 友人が自己より優れている傾向がみられた ($F(1, 107) = 2.90$, $p < .10$). スクール・モラル低群 ($n = 96$) は, 関与度と対象の交互作用が有意であるが ($F(1, 94) = 12.69$, $p < .01$), 高関与教科で自己と友人間に差がみられず ($F(1, 94) = 1.08$, ns), 低関与教科で友人が自己より優れていた ($F(1, 94) = 8.13$, $p < .01$).

5 学級適応各下位尺度と自己評価維持の関連

(1) 級友との関係と自己評価維持

学級適応診断検査 (SMT) における級友との関係尺度得点の平均は, 男子 5.09 ($SD = 4.33$), 女子 5.39 ($SD = 4.14$) であり, この間に差はみられない. したがって, 級友との関係尺度得点の 6 点以上を級友との関係高群 (安定群), 5 点以下を級友との

関係低群 (不安定群) とした.

級友との関係高群, 低群別の自己と友人の実際の成績を Figure 8 および Figure 9 に示した. 級友との関係高群 ($n = 104$) は, 関与度と対象の交互作用が有意で ($F(1, 102) = 14.95$, $p < .001$), 高関与教科では, 自己が友人より優れている傾向がみられ ($F(1, 102) = 3.83$, $p < .06$), 低関与教科では, 友人が自己より優れていた ($F(1, 102) = 4.70$, $p < .05$). 級友との関係低群 ($n = 106$) は, 関与度と対象の交互作用が有意であったが ($F(1, 104) = 13.46$, $p < .001$), 高関与教科で自己と友人の間に差がみられず ($F(1, 104) = 1.61$, ns), 低関与教科で友人が自己より優れていた ($F(1, 104) = 6.14$, $p < .05$).

(2) 学習への意欲と自己評価維持

SMT の学習への意欲尺度得点の平均は, 男子 5.63 ($SD = 5.27$), 女子 3.36 ($SD = 5.14$) であり, 男女間に有意差がみられた ($t = 3.16$, $df = 208$, $p < .01$). したがって, 男子は学習への意欲得点 6 点以上, 女子は 4 点以上を学習への意欲高群, 男子の学習への意欲得点 5 点以下, 女子 3 点以下を学習への意欲低群とした.

学習への意欲高群, 低群別の自己と友人の実際の成績を Figure 10 および Figure 11 に示した. 学習への意欲高群 ($n = 114$) は, 関与度と対象の交互作用が有意で ($F(1, 112) = 18.11$, $p < .001$), 高関与教科では, 自己が友人より優れ ($F(1, 112) = 5.34$, $p < .05$), 低関与教科では, 友人が自己より優れていた ($F(1, 112) = 5.12$, $p < .05$). 意欲低群 ($n = 96$) は, 関与度と対象の交互作用が有意であったが ($F(1, 94) = 8.41$, $p < .01$), 高関与教科では自己と友人の間に差はみられず ($F(1, 94) < 1$), 低関与教科で, 友人が自己より優れていた ($F(1, 94) = 4.92$, $p < .05$).

学習意欲と自己評価維持の関連は, 特に男子で顕著であり, 男子の学習意欲の高い群 ($n = 67$) は, 高関与教科で自己 ($M = 2.38$, $SD = .57$) が友人 ($M = 2.16$, $SD = .57$) より優れ ($F(1, 66) = 6.05$, $p < .05$), 低関与教科で友人 ($M = 2.09$, $SD = .44$) が自己 ($M = 1.90$, $SD = .47$) より優れていた ($F(1, 66) = 6.06$, $p < .05$). また, 男子の学習意欲の低い群,

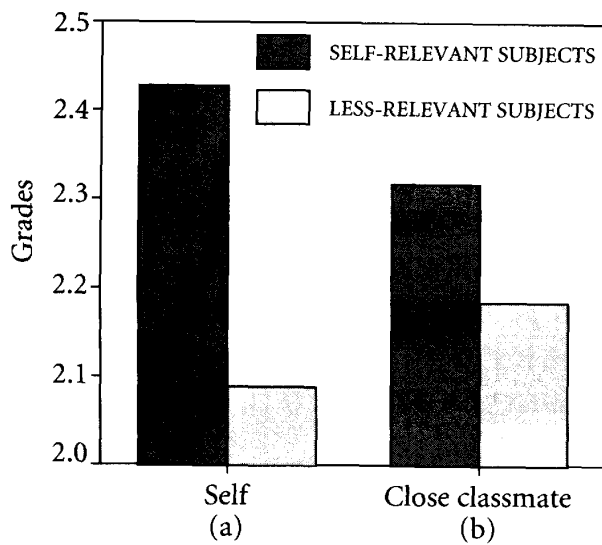


Figure 6. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects, in higher school morale group.

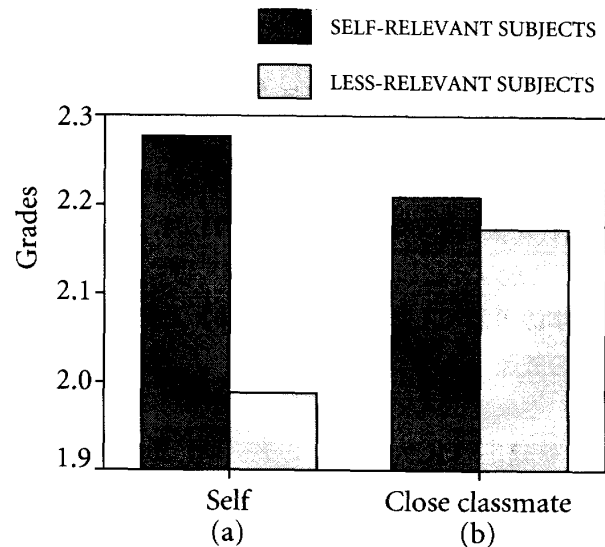


Figure 7. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects, in lower school morale group.

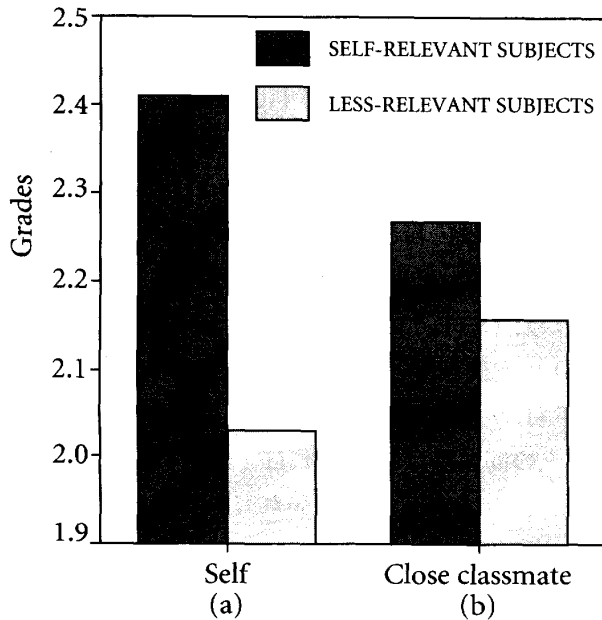


Figure 8. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects, in higher elementary school classmate relationship group.

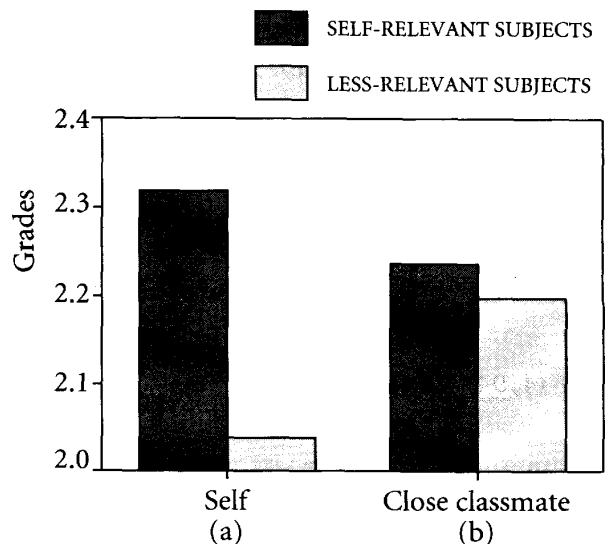


Figure 9. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects, in lower elementary school classmate relationship group.

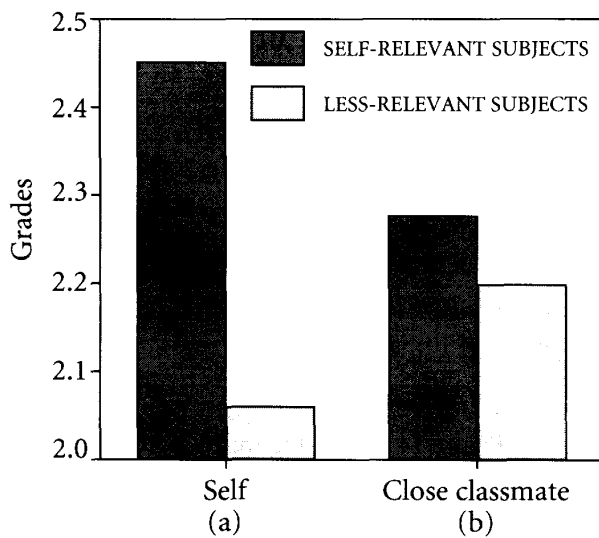


Figure 10. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects, in higher learning motivation group.

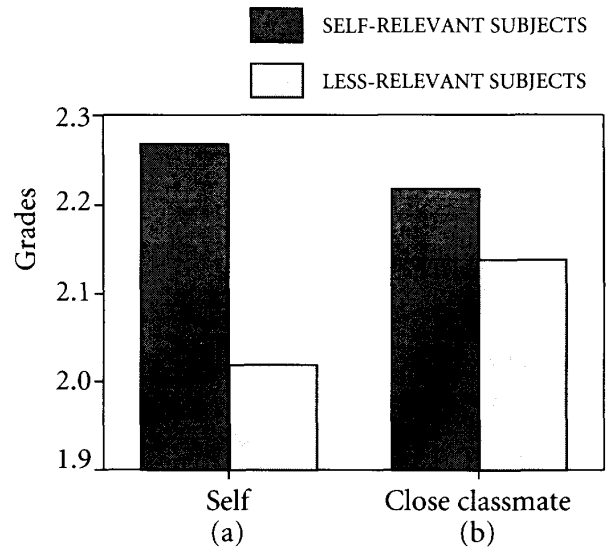


Figure 11. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects, in lower learning motivation group.

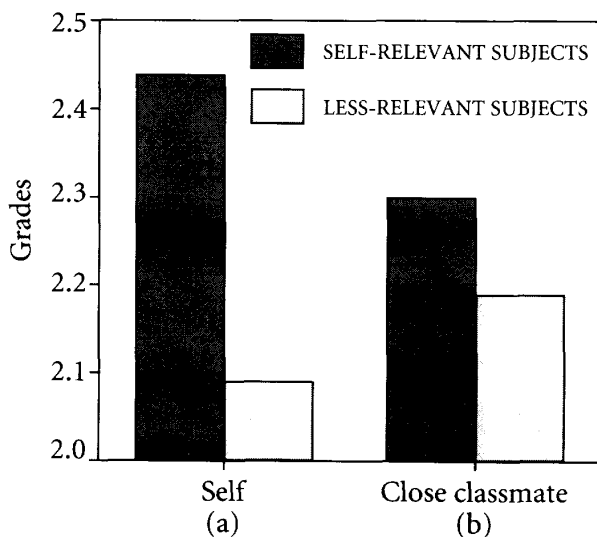


Figure 12. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects, in higher elementary school interest group.

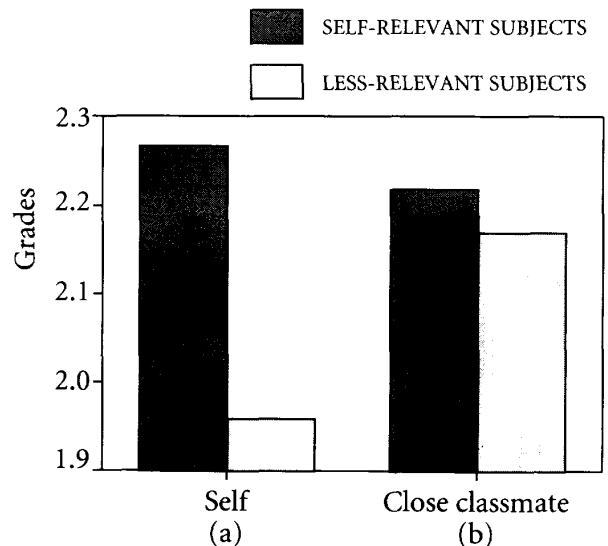


Figure 13. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects, in lower elementary school interest group.

女子の学習意欲の高い群では、高関与教科、低関与教科いずれにおいても自己と友人とで差はみられなかった。女子の学習への意欲の低い群 ($n = 51$) は、高関与教科で自己 ($M = 2.37, SD = .51$) と友人 ($M = 2.33, SD = .42$) の間で差がみられず、低関与教科で自己 ($M = 2.08, SD = .51$) よりも友人 ($M = 2.25, SD = .46$) の成績が優れていた ($F(1, 50) = 4.09, p < .05$)。

(3) 学校への関心と自己評価維持

SMT の学校への関心尺度得点の平均は、男子 6.18 ($SD = 5.47$)、女子 8.06 ($SD = 5.45$) であり、男女間に有意差がみられた ($t = 2.49, df = 208, p < .05$)。したがって、男子は尺度得点 7 点以上、女子は 9 点以上を学校への関心高群とし、男子の 6 点以下、女子 8 点以下を学校への関心低群とした。

学校への関心高群、低群別の自己と友人の実際の成績を Figure 12 および Figure 13 に示した。学校への関心高群 ($n = 118$) は、関与度と対象の交互作用が有意で ($F(1, 116) = 16.66, p < .001$)、高関与教科では、自己が友人より優れ ($F(1, 116) = 5.10, p < .05$)、低関与教科では、友人が自己より優れている傾向があった ($F(1, 116) = 3.64, p < .06$)。

関心低群 ($n = 92$) は、関与度と対象の交互作用が有意であったが ($F(1, 90) = 12.07, p < .01$)、高関与教科で自己と友人の間に差がみられず ($F(1, 90) < 1$)、低関与教科において、友人が自己より優れていた ($F(1, 90) = 10.94, p < .01$)。

(4) 家族関係の認知と自己評価維持

SMT の家族関係の認知尺度得点の平均は、男子 6.14 ($SD = 4.79$)、女子 5.37 ($SD = 4.88$) であり、男女間に有意差はみられない。そこで、尺度得点 6 点以上を家族関係の認知高群、5 点以下を家族関係の認知低群とした。

家族関係の認知高群、低群別の自己と友人の実際の成績を Figure 14 および Figure 15 に示した。家族関係の認知高群 ($n = 112$) は、関与度と対象の交互作用が有意で ($F(1, 110) = 11.65, p < .01$)、高関与教科では、自己と友人の間に差がみられず ($F(1, 110) < 1$)、低関与教科では、友人が自己より優れていた ($F(1, 110) = 10.67, p < .01$)。低群 ($n = 98$) は、関与度と対象の交互作用が有意で ($F(1, 96) = 14.53, p < .001$)、高関与教科で自己が友人より優れ ($F(1, 96) = 7.65, p < .01$)、低関与教科において自己と友人の間に差がみられなかった ($F(1, 96) = 2.16, ns$)。

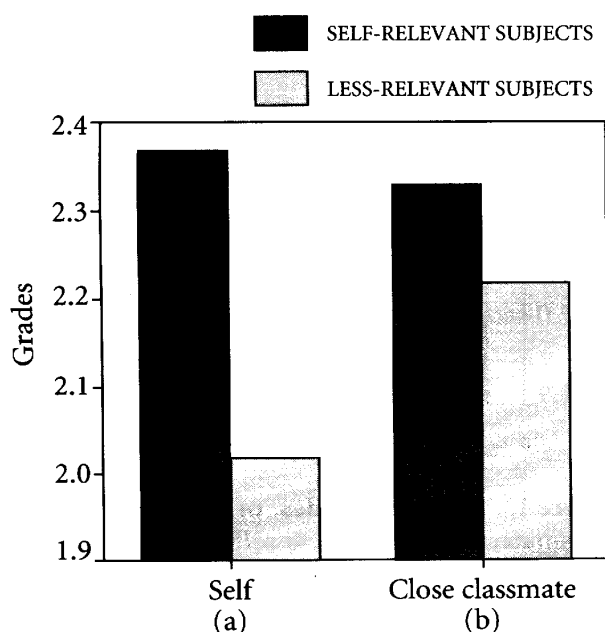


Figure 14. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects, in higher family relationship group.

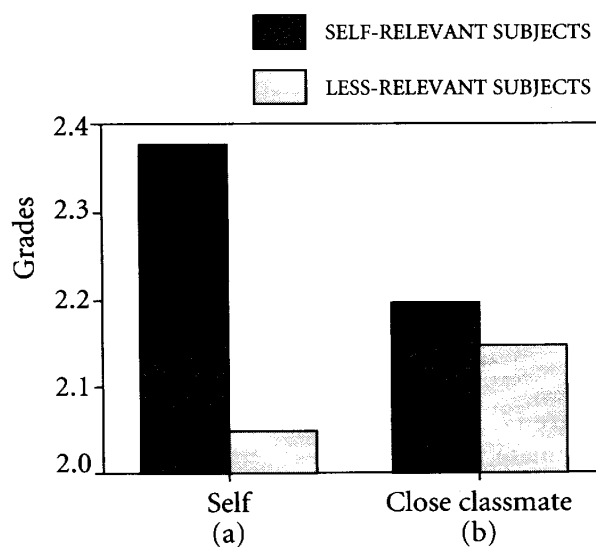


Figure 15. Actual grades of self and close classmate, on more or less self-relevant school subjects, in lower family relationship group.

考察

1 自己評価維持について

自己評価維持についての全体の結果は、SEM モデルの予測どおりであり、仮説 1 が支持された。これまでも、自己評価維持は、実際の成績を測度とした場合に明確に示されている（例えば、磯崎、1994、磯崎・高橋、1993 など）。それがここでも確認された。実際の成績が子どもにとってもつ意味は大きく、そこにおいて自己評価の維持ができるかどうか、子どもにとって重要な問題であることがうかがえる。

2 自己評価維持の男女差について

実際の成績においては、従来、男女共に自己評価維持がなされていた（例えば、磯崎・高橋、1993 など）。しかし、本研究の結果は、これとはいくぶん様相が異なる。つまり、男子においては仮説 1 が支持され、自己評価維持がみられるが、女子においては必ずしも十分ではない。これまで、認知的測度においては、自己評価維持は概して男子に強くみられ（例えば、Tesser et al., 1984 など）、実際の成績では、男女で大きな違いはみられなかった。今回の女子の結果は、認知的測度を用いた先の結果（磯崎、1997）と同様、反映過程のみが生起する結果となっている。その意味では、女子は、関与度の高い教科において、友人を高く評定しがちであるだけでなく、実際にその成績が、自己と類似したレベルの他者を友人としてあげていることを示唆している。つまり、これは、自己と友人との間で、差異よりも類似性を希求する傾向が女子に強いことと関連があるように思われる。また自己と親和的な関係にある友人の素晴らしさを認めながら、そうした他者と友人関係にある自己を肯定的にとらえようとしているのかもしれない。

3 自尊心と自己評価維持との関連について

自尊心の高い児童は、関与度の高い教科での自

己と友人については SEM モデルに沿った結果を示したが、反映過程はみられない。逆に、自尊心の低い児童は、関与度の高い教科での自己と友人との差が明確ではなく、反映過程のみが強くみられた。つまり、自尊心の高い児童は自己優位を、そして自尊心の低い児童は、友人優位の結果を示しており、自尊心高群、低群いずれの群もバランスのとれたいわゆる自己評価維持には到っていない。しかし、自己優位の状況にあることと自尊心の高さが関連し、友人優位の状況にあることと自尊心の低さが関連している点は興味深い。これはパーソナリティ特性として、優越感を抱きがちな生徒においては反映過程がみられず、劣等感を抱きがちな生徒においては反映過程のみが生起したとする磯崎・高橋（1993）の結果と類似している。いずれにせよ、自尊心の高低は、自己と友人のどちらかといえば一方的な優位・劣位関係と結びついており、自己および友人の双方を尊重する関係としての自己評価維持とは、直接つながらないことになる。

磯崎（1997）においては、自尊心の高い児童は、関与度の高い教科で、有意ではないが、自己を友人よりいくぶんか優れていると認知し、関与度の低い教科では、友人を自己よりも優れていると認知していた。本研究の結果とあわせると、自尊心の高い児童は、友人に対し、一定のポジティビティを示していることがうかがえる。しかし、それはどちらかといえば、関与度の低い教科においてその傾向が強い。その結果、認知の上では、不十分ながら自己評価維持の傾向がうかがえる。では、自尊心の低い児童についてはどうだろうか。本研究と磯崎（1997）の結果とをあわせると、自尊心の低い児童においても、他者へのポジティビティがみられるように思われる。しかも、低関与の教科だけでなく、高関与の教科においても、友人をかなり高く評定している。自尊心の低い児童が自尊心の高い児童と異なるのは、ポジティビティを示すことによって、いっそう自己評価の維持がむずかしくなっているように思われる点である。

4 学級適応（スクール・モラル）と自己評価維持について

スクール・モラルの高い群は、十分ではないが自己評価維持傾向がみられ、仮説 2 がほぼ支持された。学級や学校への適応がよい子どもは、実際の成績において自己評価維持がなされやすい。こうした子どもは、自己および友人の双方のよさを感じることでしやすい状況にある。自己にとって好ましい状況を作り出そうとしているともいえる。これに対し、スクール・モラルの低い群は、反映過程のみが生起し、自己評価維持がなされていない。これらの結果は、自己評価維持と学習活動などの関連を論じた Tesser & Campbell (1982) の考えと符合している。つまり、友人選択と学業成績、そして自己にとっての教科の関与度は、相互に密接に関わっており、それらの関連が、子どもの学校活動、学級や学校への適応に影響を与えていることが示唆される。子どもの学校活動が生き生きしたものとなるには、これらの相互関連が、自己評価の維持にとって好ましいものとなることがその一つの条件となるように思われる。

以下、各下位尺度で特徴的な結果について述べることにする。

- (1) 級友との関係と自己評価維持 級友との関係高群は、予測に沿った自己評価維持傾向がみられ、仮説 2a がほぼ支持された。すなわち、学級集団の中での友人関係が安定しており、満足感が高い子どもは、自己と友人のよさを感じとっており、自己にとって好ましい状況にある。これに対し、級友との関係が安定していない、不満足な群は、反映過程のみが生起するにとどまっており、自己のよさを十分には感じとれていない状況にある。また、逆に、そのことが、級友との関係を不安定なものにしている可能性がある。
- (2) 学習への意欲と自己評価維持 学習意欲の高い群において、予測どおりの自己評価維持がみられ仮説 2b が支持された。特に、学習意欲の高い男子児童で自己評価維持が強くみられる。学習への意欲は、学業に対する興味、関心、成功

感、努力への意志などを示している。こうした学習意欲と自己と友人との関係、教科の関与度そして実際の成績が、密接に関わっていることが示唆される。この結果は、認知的測度を用いた磯崎 (1997) の結果とも一致している。逆に、学習意欲の低い児童は、反映過程が生起するにとどまっている。また、磯崎 (1997) の結果と合わせると、学習意欲の低い児童は、関与度の高い教科においても、友人のでき具合を過大に評価しがちである。そのことが、自己を萎縮させ、学習意欲を低下させているのかもしれない。学習意欲を測定する項目には、「私は勉強なんかどうでもよいと思います」との質問項目がある。その意味で、学習や勉強そのものに対する関与度を低下させている可能性がある。

- (3) 学校への関心と自己評価維持 学校への関心が高い群は、予測に沿った自己評価維持の傾向がみられ、仮説 2c がほぼ支持された。この群は、相対的に学校との一体感があり、学校への誇りや、学校生活全体について好ましい感情をもっている。学校場面において自己評価維持がなされ、自己および友人のよさを感じとれる状況にある児童が、こうした学校への帰属意識を強く持っていることはごく自然なことかもしれない。これに対し、学校への関心の低い群は、反映過程のみの生起にとどまっており、自己よりも友人のよさを感じがちな状況にある。つまり、学校との一体感が十分ではなく、学校生活全体について好ましい感情を持っていない児童が、自己を萎縮させがちであることを示唆している。

ところで、磯崎 (1997) では、学校への関心の高群、低群いずれも、関与度の高い教科において、自己と友人との評価に差が見られなかった。しかし、実際の成績では、学校への関心高群では、自己評価の維持がなされている。その意味で、学校への関心の高群が、関与度の高い教科においても友人を好意的に高く評価しがちな傾向を示している。この点が、同様に自己評価維持がみられた学習への意欲高群との違いを示している。つまり、学習への意欲高群は、認知と実際の成績のパターンが類似しているのに対し、

学校への関心高群は、認知と実際の成績のパターンが異なっている。これは、前者が、個としての自己を強調しているのに対し、後者では、自己と友人や自己とその所属する学校とのつながりのある自己を強調した結果であると推測される。学校への関心には、「私は、毎日、学校へ行くのがなんとなく楽しい気がします」、「私は、自分の学校がほめられると、とてもうれしく思います」などの項目がある。したがって、学校への関心の高群は、自己とつながりのある友人を関与度が高い教科でもその出来具合を高く評価し、そうした友人とのつながりそのものを肯定しようとしているのかもしれない。

- (4) 家族関係の認知と自己評価維持 家族関係の認知高群は、相対的に友人の優位性を、低群は逆に自己の優位性を感じるような結果となっている。その意味で対照的な結果といえる。興味深いのは、家族関係の認知高群は、関与度の高い教科においても自己と類似した成績のよい他者を友人としている点である。家族関係の安定は、学校での友人選択において、自己評価維持よりも類似性を希求させるよう作用するのかもしれない。これはどちらかといえば意外な結果

であり、今後さらに検討する必要がある。

以上、実際の成績を測度とした本研究の結果は、認知的測度を用いた磯崎 (1977) の結果に比べ、学級適応と自己評価維持との関連がより明確に示されている。このことは、実際の成績が子どもにとって、より重要な意味をもつことの証左といえよう。学級適応の低い子ども、特に学習意欲や、学校への関心が低く、級友との関係の不安定な児童は、自己評価維持が十分ではない。これらの子どもに対して、教科の関与度や、友人選択のあり方、そして教科の出来具合など、自己評価維持の視点から、自己をより肯定的にとらえることが可能となるような働きかけの必要性が示唆される。自己および友人を自己評価維持の視点から肯定的にとらえるためには、自己評価維持の単一の要因を変えるだけでなく、自己評価維持に関わる 3 つの要因を適宜組み合わせた方が現実的であることが示されている (磯崎・高橋, 1993)。自己評価の維持を図り、自己および自己と親密な関係にある友人の双方のよさを認めることができるかどうか、学習意欲や学校への関心などの学級適応を高めていく一つの鍵となるように思われる。

引用文献

- 蘭 千寿 1990 パーソン・ポジティヴィティの社会心理学 北大路書房
- 学校モラル研究会（編） 1984 小学校用 SMT 手引：結果の見方と利用 1984 年改訂版 日本文化科学社
- 磯崎三喜年 1989 社会的比較と公平 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一（編） 社会心理学パースペクティブ 1 誠信書房 pp.184-206.
- 磯崎三喜年 1994 児童・生徒の自己評価維持機制的発達的变化と抑うつとの関連について 心理学研究, 65, 130-137.
- 磯崎三喜年 1997 児童の自己評価維持機制と学校活動：自己評価維持とスクール・モラル 教育研究, 39, 85-102.
- 磯崎三喜年 1998 社会的比較と自己評価の維持 安藤清志・押見輝男（編） 自己の社会心理 誠信書房 pp. 97-116.
- 磯崎三喜年・高橋 超 1988 友人選択と学業成績における自己評価維持機制 心理学研究, 59, 113-119.
- 磯崎三喜年・高橋 超 1993 友人選択と学業成績の関連の時系列的変化にみられる自己評価維持機制 心理学研究, 63, 371-378.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Tesser, A. 1984 Self-evaluation maintenance processes: Implications for relationships and for development. In J. C. Masters & K. Yarkin-Levin (Eds.), *Boundary areas in social and developmental psychology*. New York: Academic Press. pp. 271-299.
- Tesser, A., & Campbell, J. 1982 A self-evaluation maintenance approach to school behavior. *Educational Psychologist*, 17, 1-12.
- Tesser, A., & Campbell, J. 1985 A self-evaluation maintenance model of student motivation. In C. Ames & R. Ames (Eds.) *Research on motivation in education*. vol. 2 *The classroom milieu*. New York: Academic Press. pp. 217-247.
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. 1984 Friendship choice and performance: Self-evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 561-574.
- 山口 勸 1990 「自己の姿への評価」の段階 中村陽吉（編） 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会 pp. 111-142.

付記： 本研究にご協力いただいた児童の皆さん、学校の先生方に心よりお礼申し上げます。